頬粘膜に発現した脂肪腫の1例

九州歯科大学口腔外科学第2講座(主任:梶山 稔教授)

梶 山 稔・重 住 十 成・野 村 信 人
橋 本 清 徳・末 森 一 利・富 田 久 之
中 富 俊 介

昭和59年2月27日受付

本論文の要旨は、昭和58年9月10日、第43回日本口腔外科学会九州地方会において発表した。

Lipoma of Buccal Wall — Report of a Case —

Minoru Kajiyama, Jusei Shigezumi, Nobuto Nomura,
Kiyonori Hashimoto, Kazutoshi Suemori, Hisayuki Tomita
and Shunsuke Nakatomi

Second Department of Oral Surgery (Chief: Prof. Minoru Kajiyama)
Kyushu Dental College, Kitakyushu, Japan

Lipoma, a benign neoplasm of adipose tissue, is a common tumor that is found almost anywhere on the body.

However, oral lipomas are considered to be relatively rare.

Recently, we experienced the oral lipoma that occurred on left cheek membrane of 75-year-old woman.

Pathological diagnosis of this tumor is lipoma simplex.

As clinical findings, the shape of this lipoma is considered to be very rare.

Then, we collected 75 cases of lipoma during the past 23 years in Japan.

The results were as follows:

1. The cheek is the most common site.
2. Lipoma is more often seen at the age of 50—60 years.
3. Men and women are equally affected.

Key words: *Lipoma/Oral cavity/Surgical extirpation*

緒 言

脂肪腫は非上皮性の良性腫瘍で、脂肪組織の存在する全ての部位に発生し得るとされているが¹⁾、口腔領域における本腫瘍の発生は比較的少ないといわれている²⁾。

³⁾ 最近、私達は75歳、女性の頬粘膜に発現した脂肪腫

の1症例を経験したので、その概要ならびに文献的な調査成績を併せて報告する。

症 例

患 者：古〇チ〇，75歳，女性，主婦。

初 診：昭和58年4月18日。

主 訴：左側頬粘膜部の腫瘍。

既往，家族歴：特記事項なし。

現病歴：約15年前，左側頬粘膜部に米粒大で，無痛性の腫瘍を気付いたが，特に自覚症状もないため放置していた。昭和58年3月，義歯作製のため，某歯科医院を受診したが，同腫瘍を指摘され，当科を受診した。

現 症：全身所見；体格，栄養状態ともに中等度で，全身的にも特別な異常所見は認められなかった。

口腔外所見；顔貌は左右対称で，左側顎下リンパ節，その他に異常と思われる所見は認められなかった。

口腔内所見；左側頬粘膜に，それぞれ有茎性で，示指頭大および小豆大の腫瘍が2個相接して認められた。いずれの腫瘍も表面は滑沢で，正常粘膜色を呈し，境界は明瞭で，弾性軟，無痛性の腫瘍であった。なお，他の部位では特に異常と思われる所見は認められなかった（写真1）。

臨床検査成績：血液一般，血清生化学，尿検査，心電図などで，特に異常所見は認められなかった。

臨床診断：線維腫の疑い。

処置ならびに経過：2%キシロカインによる局所麻酔下で，腫瘍周囲の粘膜にZ字形の切開線を入れ，腫瘍を一塊として切除した。術後の経過は良好で，5か月を経過した現在，再発は認めていない。

切除物の所見：切除した腫瘍の大きさは $20 \times 15 \times 10$ mmと $5 \times 5 \times 3$ mmであった。2個の腫瘍はともに弾性軟で，表面は薄い被膜に覆われ，帯黄灰白色を呈していた。なお，全断面は充実し，帯黄色で，光沢を有する脂肪様組織であった（写真2）。

病理組織学的所見：H・E重染色による所見では粘膜下の結合織内に，周囲と境界が明瞭な成熟した脂肪組織の増殖塊が認められた。また一部では細い索状の線維性結合織により，分葉状となっていた。なお，脂肪細胞に

写真1 手術前の病巣

写真2 切除した腫瘍

写真3 H・E染色（弱拡大）

写真4 Sudan III染色（強拡大）

は異型性はみられなかった。Sudan III染色では橙黄色に染色された無数の脂肪滴が認められた。また，小さな腫瘍においても同様な所見が認められたが，大きな腫瘍

との関連性は認められなかった (写真3・4)。

病理組織学的診断：単純性脂肪腫。

考 察

脂肪腫は腫瘍実質細胞が、脂肪細胞からなる非上皮性の良性腫瘍で、脂肪組織の存在するところではどこにでも発生する可能性がある¹⁾。MacGregor ら (1966)⁴⁾によれば全身における良性腫瘍の4～5%としているが、本邦では遠城寺ら (1974)⁵⁾が良性軟部組織腫瘍8,086例を集計し、そのうち脂肪腫が19.8%であったと報告している。したがってこれらの成績からすれば、脂肪腫はさほど頻度の低い疾患とは思われない。一方、口腔領域における脂肪腫の発現頻度については Simpson (1959)⁶⁾が口腔内良性腫瘍117例のうち、6.0% (7例) が脂肪腫であったと報告している。本邦でも朱雀ら (1967)⁷⁾は口腔における良性腫瘍196例のうち、わずか2例の1.0%、橋本ら (1977)⁸⁾も良性腫瘍445例のうち脂肪腫が8例で、1.8%であったと報告し、いずれも脂肪腫が口腔領域では発現頻度の低い疾患であることを指摘している。ちなみに当教室で、1978年から1982年までの5か年間に、病理組織学的に良性腫瘍と診断された122例のうち、脂肪腫はわずか1例の0.8%で、頻度の著しく低い疾患であった⁹⁾。

脂肪腫の発現部位については MacGregor ら (1966)⁴⁾が口腔領域の脂肪腫・57例のうち頬粘膜・24例 (42.1%)、舌・11例 (19.3%)、口底部・8例 (14.0%)、下唇・6例 (10.5%) と報告し、頬粘膜に多発していた。また、Hatziotis (1971)¹⁰⁾も脂肪腫・145例を集計し、その発現部位は頬粘膜・46例 (31.7%)、舌・28例 (19.3%)、口底部・21例 (14.5%)、歯肉・8例 (5.5%)、不明・2例 (1.4%) となり、いずれも頬粘膜での多発を報告している。本邦においても久野ら (1973)¹¹⁾、橋本ら (1977)⁸⁾、内田ら (1979)¹²⁾らも同様な成績を報告している。著者らは1960年から1983年9月までの過去23年間で、本邦において、口腔領域から報告されたもの75例^{8), 11)~68)}を集計し、調査した。発現部位では表1に示すように頬粘膜・24例 (32.0%)、舌・14例 (18.6%)、次いで口底部・11例 (14.6%)、顎下部・9例 (12.0%) の順となり、他の部位では2～3例 (2.7%～4.0%) であった。

以上の結果からすれば、これまでににおける諸家の報告と同様に頬粘膜、舌に多発していた。自験例でも同様に頬粘膜に発現したものであった。

発現年齢については MacGregor ら (1966)⁴⁾が70%

表1 本邦において口腔領域から報告された脂肪腫例の部位別発現頻度 (1960～1983・9, 75例)

発 現 部 位	症 例 数	(%)
頬 粘 膜	24	(32.0)
舌	14	(18.6)
口 底 部	11	(14.6)
顎 下 部	9	(12.0)
歯 肉 部	3	(4.0)
口 唇 部	3	(4.0)
外 頬 部	3	(4.0)
舌 下 部	2	(2.7)
オ ト ガ イ 部	2	(2.7)
口 蓋	2	(2.7)
口 峡 咽 頭 部	2	(2.7)
計	75	(100.0)

表2 本邦において口腔領域から報告された脂肪腫例の年齢別発現頻度 (1960～1983・9, 75例)

発 現 年 齢	症 例 数	(%)
0～9	6	(8.0)
10～19	2	(2.7)
20～29	4	(5.3)
30～39	10	(13.3)
40～49	10	(13.3)
50～59	17	(22.7)
60～69	17	(22.7)
70～79	8	(10.7)
80～	1	(1.3)
計	75	(100.0)

は40歳代であったとし、Hatziotis (1971)¹⁰⁾も80%が40歳代以上で、50歳代以上は64%、60歳代以上は40%であったと報告している。本邦においても永井ら (1979)⁴³⁾が同様な成績を報告している。著者らの集計した75例では表2に示すように各年代層にわたって発現していたが、40歳代で13.3%、50歳代が22.7%、60歳代で22.7%、70歳代に10.7%となり、40歳代以上に70.7%と発現し、諸家の報告と同様な成績で、口腔領域での脂肪腫は40歳代以上で好発していた。

性別については Hatziotis (1971)¹⁰⁾は男性にわずかに多かったと報告しているが、Bruce ら (1954)⁶⁹⁾、Panders ら (1967)⁷⁰⁾は女性での多発を報告している。本邦では梶山ら (1967)²²⁾、久野ら (1973)¹¹⁾は性差を

表3 本邦において口腔領域から報告された脂肪腫例の性別発現頻度 (1960～1983・9, 75例)

性 別	症 例 数	(%)
男	37	(49.3)
女	38	(50.7)
計	75	(100.0)

表4 本邦において口腔領域から報告された脂肪腫例の形状別発現頻度 (1960～1983・9, 75例)

腫 瘍 の 形 状	症 例 数	(%)
結 節 型	20	(26.7)
ポ リ ー プ 型	48	(64.0)
分 葉 型	1	(1.3)
多 発 型	6	(8.0)
計	75	(100.0)

みななかったとしているが、関田ら (1976)³⁴⁾、倉地ら (1979)⁴⁵⁾ は 2 : 1 の割合で女性に多かったと報告している。著者らが集計した75例では男性・37例 (49.3%) に対し、女性・38例 (50.7%) で性差はほとんど認められなかった。このように報告者によって男女比がいくぶん異っているものの、性別と脂肪腫とは特別な関係がないようである。

脂肪腫の形状については種々な型が報告されているが⁷¹⁾、集計した75例では粘膜下での結節型が20例 (26.7%)、ポリープ型・48例 (64.0%)、ポリープ状の分葉型が1例 (1.3%)、多発型・6例 (8.0%) となり、多くの症例ではポリープ型であった。自験例のようにポリープ状の多発型は少ない型の脂肪腫例と思われる。

本腫瘍の発生機序については、これまでに種々と論究されてきたが、一般的には組織異所発生説⁶⁹⁾、正常組

織の過形成説などが挙げられている⁷²⁾。また、その成因としては先天的内因、内分泌の失調、末梢神経との関係、結核症との関連、持続的な刺激などがみられる^{69, 73, 74)}。Dixon ら (1959)⁷⁵⁾ は下顎に装着された部分床義歯のクラスプによる持続的刺激から発現した1症例を報告している。ちなみに Simpson (1959)⁶⁾ は口腔内での脂肪腫6例のうち4例は発生原因が外傷によるものであったとしている。自験例では外傷の既往もなく、その原因は明らかでなかった。

脂肪腫は病理組織学的に基質および腫瘍細胞の性状によって単純性脂肪腫、線維性脂肪腫、粘液性脂肪腫、化骨性脂肪腫、血管拡張性脂肪腫などに分類されているが^{74, 76)}、自験例では間質に線維組織が少なく、単純性脂肪腫に一致するものであった。

脂肪腫の処置については、一般に切除あるいは摘出術が実施されている。Choukas (1967)⁷⁷⁾、Horton (1968)⁷⁸⁾ らのように再発例の報告もみられ、完全なる摘出が望ましい。なお、自験例ではこれまでに再発を認めていない。

結 語

最近、私達は75歳、女性の左側頬粘膜に発生した脂肪腫の1症例を経験した。病理診断では単純性脂肪腫であったが、腫瘍の形状はポリープ状の多発型で、かなりまれな型であった。また、本邦で過去23年間 (1960年～1983年9月) に口腔領域から報告された75例を集計し調査した。その結果、好発部位では頬粘膜が、好発年齢は50～60歳代であったが、性別には関連性はみられなかった。なお、腫瘍の形状ではポリープ状のものが多くみられた。

なお、病理組織所見について種々と御助言を頂いた、口腔病理学教室福山 宏助教授に感謝します。

引 用 文 献

- 1) 今井 環・橋本美智雄：病理学。第2版，医学書院，東京，1963，357—358。
- 2) 石川梧朗：口腔病理学Ⅱ。永末書店，京都，1982，570—572。
- 3) 西山茂夫：口腔粘膜疾患診療図説。金原出版，東京，1970，263。
- 4) MacGregor, A. J. and Dyson, D. P. : Oral lipoma. *Oral Surg.* 21 : 770—777, 1966.
- 5) 遠城寺宗知・岩崎 宏・小松京子：わが国における良性軟部組織腫瘍。癌臨 20 : 594—609, 1974.
- 6) Simpson, H. E. : Lipoma of oral cavity. *Oral Surg.* 12 : 349—352, 1959.
- 7) 朱雀直道・亀山忠光・床島昭男：頬粘膜下に発生した脂肪腫の2症例。口科誌 16 : 499—503, 1967.

- 8) 橋本賢二・武田義豊・堂原義美・山下佐英・塩田重利：口腔底脂肪腫の1例．日口外誌 23：837—841，1977．
- 9) 梶山 稔・重住十成・黒川英雄・橋本清徳・野村信人・三浦正明・河野博之・北村 晃：生検材料からみた最近5か年間における各種疾患の臨床的観察．九州歯会誌 37：964—970，1983．
- 10) Hatziotis, J.Ch. : Lipoma of the oral cavity. *Oral Surg.* 31：511—524，1971．
- 11) 久野吉雄・内山敏子・庄内晃二：歯肉に発生した脂肪腫の1例．日口外誌 19：135—138，1973．
- 12) 内田 稔・河合 保・寺辺勝之・内田廣美・日比野好行・宮本康一・大里宏治・園山 昇：左側頬粘膜部に発生した脂肪腫の1症例．日口外誌 25：714—718，1979．
- 13) 市川辰巳：口底脂肪腫の1例について〔会〕．日口外誌 6：144—145，1960．
- 14) 小淵貞夫：口腔底に発生した稀有なる脂肪腫の1例．長崎医学会誌 31：125—127，1961．
- 15) 林 四郎・間中信子：口腔底脂肪腫の1例〔会〕．日耳鼻 65：245，1962．
- 16) 大井一正・千葉英輔：口腔底に発現した巨大な Lipoma の1例〔会〕．日口外誌 8：220，1962．
- 17) 沖田和巳・寺井 修：顎下腺と一体をなせる脂肪腫の1例〔会〕．大阪医大誌 21：201，1962．
- 18) 加藤純彦・田村直民・森川道也：口蓋脂肪腫の1例．耳鼻臨床 56：375—377，1963．
- 19) 小川克二：舌脂肪腫1症例〔会〕．日耳鼻 66：1580，1964．
- 20) 武内博文・松井七郎：一見嚢腫を思わせた頬部粘膜下脂肪腫の1例〔会〕．日耳鼻 68：1044，1965．
- 21) 野井倉武憲：舌に生じた脂肪腫の1例．日歯評論 287：97，1966．
- 22) 梶山 稔・古賀久保・中島嘉助・井口次夫・宮原弘次・渥美剛重・原 哲哉・宮坂太郎・北村勝也・橋本紀三・田村知治・村上俊明：脂肪腫の2例．九州歯会誌 21：34—40，1967．
- 23) 山田考良・立松憲親・田川 清・永瀬英樹・北洞英克・富田金嘉：脂肪腫の2例について．日口外誌 13：348—351，1967．
- 24) 荻原 力・川崎健治・村山康太・藤崎東洋男：舌下部及び顎下部にみた脂肪腫と皮様嚢胞．日口外誌 14：25—28，1968．
- 25) 佐藤伊吉・滝川富雄・赤星ミチ子・丸山早苗・小平泰彦・古池敏純・須川委洪：顔および口腔軟組織に生じた脂肪腫の5例について〔会〕．日口外誌 14：76，1968．
- 26) 宮竹 昭・末広 実・串田明典・中村栄一：幼児口腔底脂肪腫の1例〔会〕．日耳鼻 72：2016，1969．
- 27) 河村正明・南波宏行・福田 博・松川清三：左下顎臼歯部頬側歯槽粘膜に発生した脂肪腫の1例〔会〕．口科誌 18：849，1969．
- 28) 中村保夫・荻野益男・中条正仁・高井稔郎：口腔底にみられた脂肪腫の1例〔会〕．日口外誌 16：245，1970．
- 29) 中室嘉康・高島 洋・谷本啓三・山口良郎：左側頬粘膜下に発生した単純性脂肪腫の1例．歯科医学 36：674—677，1973．
- 30) 田中広一・菊地 康・前田栄一・岡辺治男：巨大な口腔脂肪腫の1例〔会〕．口科誌 22：677，1973．
- 31) 大屋高德・藤岡幸雄・工藤啓吾・小川邦明・柴田輝郎・東山札子・灰塚邦嘉・斎須繁雄・嶋中豊彦・佐藤良三：頬粘膜部に発生した脂肪腫の1症例〔会〕．日口外誌 19：204—205，1973．
- 32) 亀山嘉光・豊嶋健治・豊嶋昭治・木村卓生・村上俊明・下川公一：舌下部に発現した巨大な脂肪腫の1例．九州歯会誌 29：390—392，1975．
- 33) 伊藤泰蔵・永山武彦・新森彬博・山下佐英：右口腔底に発生した脂肪腫の1例〔会〕．日口外誌 21：861，1975．
- 34) 関田俊介・丸谷雅晴・松浦正朗・松本康博・瀬戸暁一・渡辺義男・菅原信一：脂肪腫の2例．鶴見歯学 2：69—74，1976．
- 35) 飯田 武・赤根賢治・阪口 晴・蓮舎勝克・岡野博郎：口腔底に発生した巨大な脂肪腫の1例．臨床歯科 282：32—35，1976．
- 36) 児玉 実・杉田尚史：軟口蓋に発生しためづらしい脂肪腫の1例．耳展 19：461—462，1976．

- 37) 小沢孝雄・横尾 剛・福田 博・河村正昭・大橋勝広・陶部 智：左側頬粘膜に発生した脂肪腫の1例〔会〕. 日口外誌 22：967, 1976.
- 38) 小泉明久・松井 茂・田原保夫・高柳尹立・小川忠邦：同一口腔内に見られた Lipoma と Solitary bone cyst の1例〔会〕. 日口外誌 23：342, 1977.
- 39) 高野伸夫・松井 隆・小鹿典雄・斎藤 力・田代教平・酒井康友：頬部脂肪腫の2例. 日口外誌 23：569-573, 1977.
- 40) 飯塚芳夫・藤 秀敏・大村武平・手島貞一・林 進武・岡辺治男：口腔領域にみられた脂肪腫. みちのく歯学誌 8：25—26, 1977.
- 41) 藤好ふみ子・緒方孝則・田縁 昭・児玉園昭：舌に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 24：575—578, 1978.
- 42) 真喜屋恒代・山城正宏・安里幸子・八木政明・銘苅 清・藤井信男・小守 昭：頬部に生じた脂肪腫の2例. 口科誌 27：97—102, 1978.
- 43) 永井譲次・戸塚盛雄・増尾勝己・清水正嗣・塩田重利：脂肪腫に関する臨床統計的観察〔会〕. 口科誌 27：442, 1978.
- 44) 和田直子・結束 温・石川 暁・金子敏雄：軟口蓋の脂肪腫症例〔会〕. 日耳鼻 81：746, 1978.
- 45) 倉地洋一・木村 享・木村義孝・桜田重世・南雲正男・榎本昭二：下口唇にみられた脂肪腫の1例〔会〕. 日口外誌 25：733, 1979.
- 46) 都家常雄・伊藤輝夫・原 博信・溝越 孝：顎下部にみられた脂肪腫の1例〔会〕. 日口外誌 25：218, 1979.
- 47) 三科正見・小屋一成・福岡道明・高井 宏・渡辺 治・斉藤武郎・河原裕憲：幼児の頬粘膜に発生した脂肪腫の1例. みちのく歯学誌 10：34—35, 1979.
- 48) 川原秀樹・竹中将純・宮城 巧・二見正人・亀山忠光・朱雀直道：幼児の頬部に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 25：886—889, 1979.
- 49) 高井克憲・各務和宏・田邊 昭・川原貴和・稲本 浩・倉内 剛・倉内 淳：舌に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 26：153—156, 1980.
- 50) 田中大順・山本悦秀・沖 次郎・福田 修・玄番涼一・古田 勲・稲垣暁夫・小浜源郁・小田島哲世・成松英明：口腔領域に発生した脂肪腫8例の臨床的観察. 日口外誌 26：198—203, 1980.
- 51) 野村 篤・佐藤敏明・三枝富司夫・久野吉雄：下口唇に発生した脂肪腫の1症例について〔会〕. 日口外誌 26：523, 1980.
- 52) 八重垣健・亀山忠光・喜多清基・岡本栄仁・朱雀直道：舌にみられた脂肪腫の1例. 日口外誌 26：1563—1567, 1980.
- 53) 向井則介・大平弘司・三沢芳光・長谷川 明・木村 裕・青柳秀一・林 俊郎・片桐正隆：頬粘膜に発生した大きな脂肪腫の1例〔会〕. 歯学 68：318, 1980.
- 54) 佐々木治夫：口腔底脂肪腫の1例. 耳鼻 26：354—356, 1980.
- 55) 伊知地 明・山岡 稔・林 俊子・河住 信：舌に発生した脂肪腫の1症例〔会〕. 松本歯学 7：310—311, 1981.
- 56) 升井一郎・金原哲雄・林 升・浜坂洋一・本田武司・古本克磨・沢熊正明：舌脂肪腫の1例. 福歯大誌 8：84—91, 1981.
- 57) 大林茂樹・大北和夫・原 潤一・佐藤 力・吉賀浩一・高橋悠夫・瀬山 淳：脂肪腫の3例〔会〕. 広歯誌 13：374, 1981.
- 58) 鶴野一洋・堂原義美・井ノ上俊郎・黄 弼岑・今村光俊・中村 繁・宮崎正忠・上村芳記・山下佐英：軟口蓋鼻咽腔部に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 27：1052—1055, 1981.
- 59) 上橋陸海・平賀三嗣・増田敏雄：顎下部に発生した脂肪腫の1例〔会〕. 口科誌 30：357—358, 1981.
- 60) 皆川 享・東江良昭・井出公一・鈴木一則・坂井能達・西田紘一・久野吉雄：顎下部に発生した脂肪腫の1症例〔会〕. 口科誌 30：581, 1981.

- 61) 西野治邦・水谷英守・斉藤 憲・大橋 靖・石木哲夫：頬部に発生した脂肪腫の1例．新潟歯会誌 11：31—36, 1981.
- 62) 南 吉昇・南 吉文・笹生俊一：舌脂肪腫の1例．耳展 24：165—168, 1981.
- 63) 千葉博茂・葛井 正・穂積良光・山口勝則・内田 稔・園山 昇：オトガイ下部に発生した脂肪腫の1症例．口科誌 31：102—107, 1982.
- 64) 永見輝生・領家和男・小川隆嗣・尾崎登喜雄・浜田 驍：舌に見られた多発性脂肪腫の1例〔会〕．口科誌 31：333, 1982.
- 65) 伊藤信明・岡村 悟・沼口隆二・橋本和子・工藤啓吾・藤岡幸雄・武田泰典・鈴木鍾美：乳児の頬部に発生した脂肪腫の1例．日口外誌 28：739—744, 1982.
- 66) 中村 繁・堂原義美・牧角淳朗・下田平世毅・西谷啓昭・新村諄一郎・山下佐英：上唇部に発生した巨大な脂肪腫の1例．口科誌 31：438—444, 1982.
- 67) 根本辰郎：舌脂肪腫の1例〔会〕．日口外誌 29：1162—1163, 1983.
- 68) 金田式世・岩見弘司・太田豊彦・高木宣雄・立松憲親：脂肪腫の2例と文献的考察．日口外誌 29：1584—1590, 1983.
- 69) Bruce, K.W. and Royer, R.Q. : Lipoma of the oral cavity. *Oral Surg.* 7 : 930—938, 1954.
- 70) Panders, A.K. and Scherpenisse, L.A. : Oral lipoma. *Br. J. Oral Surg.* 5 : 33—41, 1967.
- 71) 石川七郎・市川平三郎・斉藤達雄・菅野晴夫：臨床腫瘍学．朝倉書店，東京，1982, 1291—1292.
- 72) Stout, A.P. : Liposarcoma—the malignan tumor of lipoblasts—. *Ann. Surg.* 119 : 86—107, 1944.
- 73) Moore, P.A. : Clinical diagnosis of neoplasms of the oral cavity. *Oral Surg.* 1 : 488—491, 1948.
- 74) 田中 順：頬粘膜に生じた線維性脂肪腫の1例．口病誌 28 : 251—257, 1961.
- 75) Dixon, W.B. and Ziskind, J. : Lipoma of oral cavity. *Oral Surg.* 9 : 575—577, 1959.
- 76) 間仁田恭一・帖佐勝造：口腔の線維性脂肪腫について．日口外誌 10 : 231—233, 1964.
- 77) Choukas, N.C. : Lipoma of buccal wall. *J. Oral Surg.* 25 : 371—374, 1967.
- 78) Horton, J.E. : Lipoma of the tongue. *Oral Surg.* 25 : 914—918, 1968.